

心法の事私覺申も、此度被仰下候張横渠の説にて御座候。耳あれば聰、目あれば明、是即耳目の法にて候。有物有則、則は法也と朱注に有之候。耳目に聰明の法あるごとく、心には虚靈不昧、是則心の法にて候。然共儒は此虚靈不昧に、具義理具萬事をばなさずして心法と仕候。畢竟理を主と仕る故にて候。佛者は専ら此虚靈智覺を以て、天理を起滅仕候故吾儒の心法と違ひ申候。乍去心は性と別あれば、心ばかりを引離し見候へば、成程虚靈智覺を心法と申は、遠も無之候へ共、天命の性を不知して本原に暗く候故、心ばかりを貴び候て、精神を弄し天理を滅し申候。委細は筆紙に難申盡、其上手痛候て存候様に筆廻り不申草々申上候。是にてはとくと御合點被成間敷と存候。己上。

中庸孔門傳授心法

正蒙大心篇。釋氏不知天命。而以心法起滅天理。以小緣大。以末緣本。其不能窮。而謂之幻妄。眞所謂疑氷者歟。

一、青地兼山の風懷

亡兄兼山君、和井龜庵主人對雪有感見寄之作及此以下詩

歌、皆兄作也。井龜は山本基庸別號也。

江樹雪晴逐望來。閑行到處曉燈々。剩看寒月印溪水。故惹春情自倚梅。

客思

木落風蕭瑟。秋高霜氣清。長空何所望。曉月故園情。柴の戸は雪降こめて梅が香の通ふばかりの道ぞのこれるちれば又春の花ともまがひにきふれるあらしの庭の初雪松かぜも絶えぬる雪の曉にうづみのこして鐘ひやくなりまだしとはおもひ捨てても夕暮の空だのめなるわが心かな忍ぶればならはされつゝ君にさへ漏しも果すぬるゝ袖哉 餞別の詩を人の送りけるに留め侍ける

旅衣袖につゝむもいかならむことの葉草の花のほひを 殘菊を人にやりけるに

かく斗人目かれ行く淺茅生に残るもあはれしら菊のはな いづれの年か、越後の國名立といふ所を過ぐるとて趙 軼が事おもひよりて

などてかく道もなき迄あらすらんおのが名立の浦の潮風 客舎を辭して出るとて菊にむすび侍る

出ていなば庭の露霜秋更けて隠るゝ花の名にや咲かまし

隣ながらも人やる事だにかたき世の中なれば

うぐひすの鳴音ばかりや君が宿我宿としも隔てざるらん

武藏國よりふるさとに歸り侍るとて

むさしのゝ草の一もと分しよりおもひ越路の空の遙けさ

我師の能登國へゆけるを、津幡といふ所迄送り侍りて、

今宵高松の浦までとありければ

君が行くそなたの空は白雲のあらしもいかに高松のさと

不忍池の鳥の聲を聞て

しのばすと名におふ池の水鳥も昔ながらの月に鳴くなり

嘗聞赤穂義士之墓在東都泉岳寺。義士賜死十年于今。

當時僕在北海聞此烈事。後過東都三。職事軼掌。不

能一詣諸士之墓。今茲壬辰秋七月朔。得往拜趨墓前。

感慨何止。嗚呼成仁取義諸士有焉。聊操筆述鄙懷云。

蕭寺經過地。白雲空復情。精忠天地動。高義古今明。草簇

疊々塚。樹深鬱々城。留連人不見。帳望淚霑纒。

雨中花 甲辰春

打霞み雨や降るらん花の香のやゝしめりゆく春のゆぶ暮

暮春山路の花を 同年

山風と名にこそたてれ遅ざくら

閑庭の菊を折りて心友浚新君のもとにおくるとて

秋來病起與誰期。寒菊開搖落時。此日若非爲君折。籬

邊孤負傲霜枝。

色香しる君が爲とて菊の花うつろはぬ間に手折こそすれ

鳩巢老人漫書

鳩巢先生、園中の菊を手折て贈り給ふ。其詩歌を和し

奉りて

逆路蹉跎難與期。高歌一曲舉杯時。欣君採菊遙堪贈。似

爲酒罍添數枝。

手折り來る君がこゝろをしら菊の秋の色そふ淺茅生の宿

浚 新拜艸

此贈答の風雅を北地に聞侍りて、浚新が許に申つかは

しける

手折しも詠むる人ももろともに千とせの秋や白菊のはな

遅 櫻

おそざくら又ちる春の夕かな 丁未春